

## 稗田一穂の画業

稗田一穂は、1920（大正9）年に現在の和歌山県田辺市に生まれた日本画家です。惜しくも昨年3月に満100歳で逝去しましたが、10代から最晩年まで、90年近くにも亘って画家としての道を一筋に歩き続けました。

稗田の父は、若い頃に画家になる夢をもちながら果たせず、デザイナーとして仕事をしていました。その仕事の都合で、一家は稗田の幼少期に大阪市に出てゆきます。この父の理解もあって、稗田は10代の初め頃から画塾に通い始め、大阪市立工芸学校（現・大阪府立工芸高等学校）に進学します。そこで初めて日本画の制作に触れ、その画材に魅せられた稗田は、専門的に取り組むことを決意して、東京美術学校（現・東京藝術大学）に進みました。

稗田が美術学校に入る前年には、国家総動員法が公布され、在学中には太平洋戦争の口火が切られるなど、戦時体制が強まる中で修業はけて恵まれたものではありませんでしたが、卒業制作で川端獎学資金賞を受け、戦争が終わって間もなくに復活した官展、日本美術展覧会（日展）に入選を重ねるなど、着実に画家としての歩みを進めました。

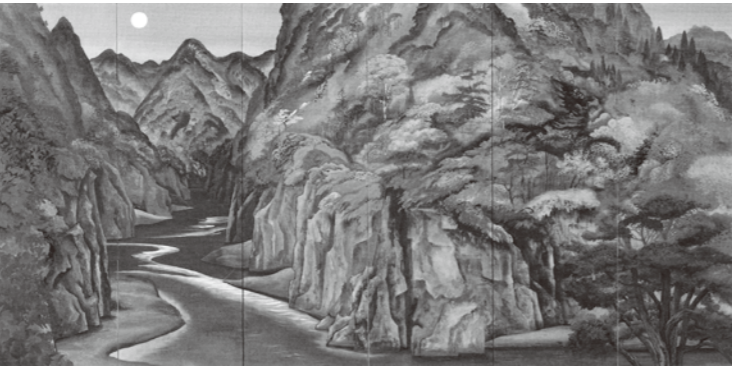
画家としての大きな転機となったのは、1948（昭和23）年に、山本丘人、吉岡堅二、上村松篁ら東西の日本画家13名が、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期す」との綱領を掲げて旗揚げした「創造美術」の公募展に、西洋の童話のワンシーンを描くような斬新な表現の作品で応募して入選し、評価されたことでした。以後の稗田は「創造美術」の同志とともに、新しい時代の日本画の表現を切り拓いてゆくことに挑みます。



稗田一穂〈流鶯〉1962（昭和37）年 和歌山県立近代美術館蔵

その中で、特に現代的なモチーフと構成によって花鳥画の枠を広げる作品の制作は、稗田の個性的な芸術を確立するものとなり、画家としての地歩も固まりました。

「創造美術」の活動は3年余りで終わり、1951（昭和26）年に彫刻部、建築部を擁する洋画の団体「新制作派協会」と合流して「新制作協会日本画部」となりま



稗田一穂〈皎月〉1988（昭和63）年

箱根・芦ノ湖 成川美術館蔵

したが、このとき稗田は同会の会員に推挙され、その後1974（昭和49）年に同部が独立して「創画会」を設立してからは、名実ともに同会を代表する画家の一人として意欲的な作品を発表し続けました。

1970年代の末頃、稗田が遷厝を迎える頃から、郷里、和歌山の熊野と、居住した東京、成城の風景が新たなモチーフとして浮かびあがり、花鳥画から風景の表現へと制作の主が移ってゆきました。以降の独特の詩情を有し、内面的な表現の深まりをみせる作品は、稗田の制作を代表するものとして高く評価されています。

最晩年まで自己の作品を厳しく見つめ直す姿勢を失わず、自身の表現を革め続けた稗田の90年にも及ぼんとする画業を、今秋から来年初にかけて、和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館が共同して開催する展覧会によってお伝えします。故人を偲び、その芸術を改めて広く紹介する機会にしたいと思います。

（学芸員 三谷 渉）

## INFORMATION

特別展

**稗田一穂展**

会場／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館

会期／2022年11月19日(土)～2023年1月15日(日)

開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日／毎週月曜日（ただし1月9日は開館）・11月24日(木)

12月28日(水)～1月4日(木)・1月10日(火)

観覧料／田辺市立美術館:600円

熊野古道なかへち美術館:400円

※学生及び18歳未満の方は無料

◆田辺市立美術館では12月12日に一部展示替を行います。

## 雑賀清子のスケッチ

雑賀清子（1933～2017）は和歌山県美浜町に生まれ、女子美術大学の洋画科を卒業後、ベルギーでステンドグラスの制作を学んで帰国しました。帰国後は主に郷里で制作と指導を行っていましたが、1980年代のはじめ頃から、およそ30年間にわたって田辺市中辺路町周辺でのスケッチを重ねています。雑賀がスケッチの対象としたのは自然であり、それも華やかに咲き誇る草木ではなく、足下の小さな花や雑草でした。それらの草花に、雑賀は自分自身の存在を重ね合わせながらスケッチしていました。

雑賀はスケッチだけではなく、対象の印象を言葉としても残しています。《ふゆいちご》へよせた「凍けのこった雪の間からのぞく真っ赤な実と濃緑の葉のつやは冷えきった空気を静かに別世界に連れ去りそうだ」、《のぶどう》へよせた「青、紫、おしゃれだね」、《やまぼうし》へよせた「つい近寄りたくなる」などです\*。そこには私たちが見逃してしまいがちな小さな存在や何気ない瞬間に、詩と生命を見出していた雑賀のまなざしをうかがうことができます。自然界の小さな存在を見つめ続けた雑賀のスケッチは、その温かなまなざしが形象化されたものと言えるでしょう。

この雑賀の植物スケッチを紹介する館蔵品展を、来年の2月から3月にかけて田辺市立美術館で開催します。雑賀が目じた、ひたむきに生きる小さな存在と、それが放つ命の美しさをお伝えする機会になれば嬉しく思います。

同時に、田辺市出身の洋画家、原勝四郎（1886～1964）の植物スケッチを特集する展示も開催します。速筆に植物の特徴をとらえるスケッチは、原の油彩画の表現にも通じるもので、確かな眼と画技がうかがわれます。

会期末の3月25日、26日には、美術館のある新庄総合公園で第61回全日本花いっぱい田辺大会が開催されます。これにあわせて、当館はこの2日間の観覧を無料にします。大勢の方々に、画家たちの植物へのまなざしを感じていただければと思います。

（学芸員 知野 季里穂）

※ここに雑賀の言葉を紹介した3点のスケッチは、いずれも今号の折込付録、一筆箋ミニの図版に使用しています。

## INFORMATION

館蔵品展

**雑賀清子 一草花によせる一**

会場／田辺市立美術館

会期／2023年2月4日(土)～3月26日(日)

開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日／毎週月曜日・2月24日(木)・3月22日(水)

観覧料／260円 ※学生及び18歳未満の方は無料

## ORANGE vol.137 付録

## 一筆箋ミニ

本紙折込部分を点線に沿って切り離してお使いください。ちょっとした贈り物に添えたり、書類を送るときのメモにしたり、様々なシーンでお使いいただけるのではないかと思います。

## 絵画と出会う「この一点!」

### 近代紀南の画家Ⅲ 福田静處

会場：田辺市立美術館

会期：2022年9月17日（土）～11月6日（日）

田辺市立美術館では、近代に紀南出身者で画家として活動した人物の軌跡を確認し、当時の当地の美術の動向と日本の近代美術史との関係を位置づけて紹介する展覧会シリーズ、『近代紀南の画家』を2018（平成30）年から開始している。3回目となる今回は、漢詩や俳句、短歌に秀で、絵画もよくした新宮出身の文人、福田静處（1865～1944 / 本名は伊佐次郎、別号に古道人・把栗など）の制作を取り上げる。

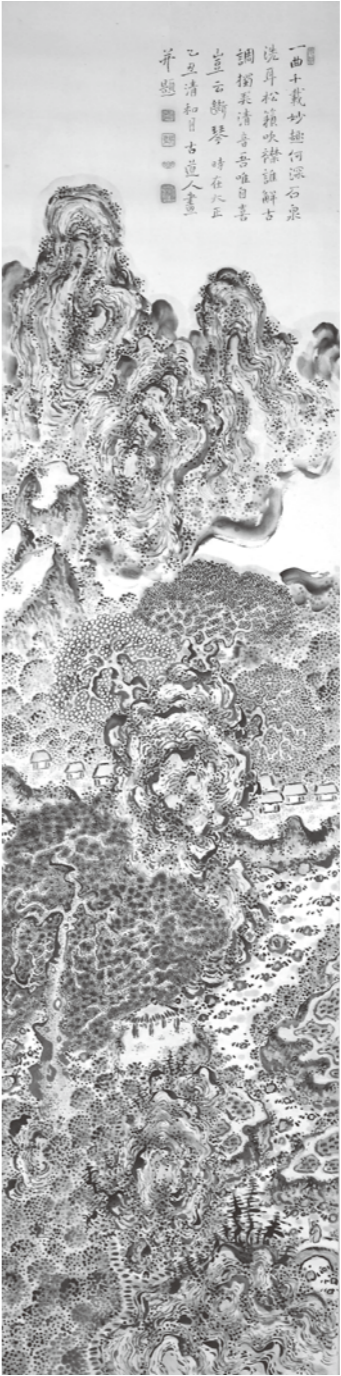
静處の表現は、中国や日本の詩文、絵画を広く学んで得た教養が基礎となっている。本作品の箱書には「大雅堂先生」の「筆意」にならうと記されており、江戸時代の文人画家、池大雅もしくは同門の系譜に連なる画家の表現に学んで描かれたことが示されている。画中に赤い斑文を付すなど、淡彩を用いた山水図のことを、静處は「大雅式山水」と呼んでおり、本作品でもそれが確認できるが、それ以外にも樹木、岩山の稜線の力強さ、墨の濃淡の使い分けによる光の表現は大雅の技法をうかがわせるものである。

静處の書簡には、清貧の逸話が多く残る大雅の生き方に学んでいたことが記されたものがあり、「筆意」は絵画の技法に留まらず、静處が憧憬した大雅の精神性も含めて理解する必要があるように思われる。本作品が描かれた1925（大正14）年前後は、居住地京都にて妻子の看病に追われ、生活に困窮していた時期であった。

本作品に添えられた漢詩には、泉の流れや松に吹く風の音を音楽として独り楽しむ情景が詠まれているが、日々の諸事や、不況の中で生活のための資金繰りに追われていた静處の実生活は、画中の詩に謳われるような文人の理想とする喧騒のない隠居生活とは程遠いものであったはずである。

しかし、俗世から離れられない中でも古人に深く学び、その境地に至ろうとする静處の潔い姿勢が、本作品のような表現を生み出したのであろう。

（学芸員 糸川 風太）



福田静處山水図 1925（大正14）年 個人蔵